



TITLE:

<書評>堀江未央著『娘たちのいない村 --ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会、2018年、4,000円+税、354頁

AUTHOR(S):

川瀬, 由高

CITATION:

川瀬, 由高. <書評>堀江未央著『娘たちのいない村 --ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会、2018年、4,000円+税、354頁. コンタクト・ゾーン 2019, 11(2019): 498-504

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244004>

RIGHT:

堀江未央著

『娘たちのいない村——ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』

京都大学学術出版会、2018年、4,000円＋税、354頁

川瀬由高*

中国農村でフィールドワークを行ってきた評者は、現地の人（とくに男性）とお喋りをしているとき、「日本には女性が多いか」（在日本女人多不多？）という妙な質問をたびたび受けた。当時、額面どおりにこの言葉を捉えていた評者は、「日本では男女の割合はだいたい同じだ」などと答えていた。それは、一人っ子政策という背景と、女兒よりも男兒（男系子孫）が選好されるという傾向のために、中国漢族社会では人口性比の不均衡が存在することを踏まえての回答であり、会話も特によどみなく進行しているように感じていたのだが、どうやら当時の評者は、先の質問の意図を十分に理解できていなかったようである。そのことに気づいたのは、先日ある調査地を訪れた際に、ふたたびこの質問を投げかけられたときだった。この、やや粗野で直接的な、ほとんど定型句となっている表現には、実のところ中国の現状との対比が含意されていたのだ。すなわち、中国農村部はまさに「若い女性がほぼいない社会」（11頁：以下、本書からの引用は数字のみ示す）となっていたのであり、その問いは、ヨメが見つからないという切迫した思いからなされたものだったのである。

本書は、中国西南の「娘たちのいない村」を舞台に、生まれ育った山村を離れ遠方の地へと嫁ぐに至ったラフの女性たちの等身大の姿を描いた、良質な民族誌である（第22回国際開発研究大来賞受賞）。この遠隔地結婚という現象を生起させるマクロな力学たる「ヨメ不足の連鎖」は、一般に女性の社会進出と上昇婚志向、そして地域間経済格差に関わる事象であるとされる。たとえば、出稼ぎなどをきっかけに郷里を離れた女性が（より経済的条件の良い）移動先社会において結婚を選択するならば、郷里にはヨメ不足が発生する。そしてそこであぶれてしまった男性は、相対的に貧しい地域から妻を迎えることになる、という訳である。やや粗雑なスケッチになるが、このような女性の婚姻移動の連鎖を俯瞰すると、内陸農村⇒沿海部農村⇒都市部⇒海外という社会移動の構造が見えてくる。

著者の堀江未央氏は、2010年から2012年にかけて、先の図式の末端部に位置するヨメ

*KAWASE Yoshitaka 江戸川大学 ychuanlai@gmail.com

の送り出し社会、雲南省瀾滄ラフ族自治県の一村落において住み込み調査を行うとともに、遠隔地の漢族農村へと嫁いだ女性のもとを訪れるというマルチサイト調査を実施している。その民族誌調査は、移動先の女性のみを対象としてきた従来型の移民研究やマクロな人口動態論では捉えることのできない、女性たち一人一人の声にまっすぐに向き合うことを可能とした。本書の構成は以下の通りである。

若い女性はどこ？ ——「蜂を焼いた村」で

- 第1章 女性が流出する社会
- 第2章 ラフ村落の空間秩序と婚姻慣行
- 第3章 遠隔地婚出の登場と変遷
- 第4章 遠隔地婚出をめぐる村人たちの語り
- 第5章 逡巡するラフ女性たち
- 第6章 女性の属する家はどこか
- 第7章 結論 移動する女性の主体と所在

女性たちの声に丹念に耳を傾けて、その等身大の姿を描くという著者の試みの意義は、既往の婚姻移動論およびエージェンシー論との対照においてよく理解できる。第1章では、女性の遠隔地結婚（long-distance marriage migration）をめぐる研究状況とともに、本書を貫く研究視座が示される¹。

著者によれば、1970年代以降に世界的に進展した越境移動者の女性人口の増加（サッセンのいう「移動の女性化」）をうけて進展してきた研究群では、女性らが貧しい南から豊かな北へと移動するという「グローバル・ハイパガミー」（コンスタブル）の傾向が指摘されてきた。しかし、このようなグローバルな政治経済的構造を念頭においた諸研究においては、移動する女性の「被害者性／脆弱性」が指摘されたり、あるいは逆に、移動が女性のエージェンシーを「獲得／発揮」する契機となることが強調されてきた。これら先行研究の意義を評価しつつも、著者は、そこには女性を抑圧する社会構造や言説へのアンチテーゼとしてエージェンシーを過度に評価する傾向があったと喝破する。

そして著者は、本書では「女性の主体性を強調するだけでなく、他者との関わりの上で様々に揺れ動く女性と、そのような女性を取り巻く人々との相互関係に着目する関係論的なアプローチ」（27）を採ると宣言する。これはまた、ジュディス・バトラーに由来するエージェンシー論の本来の企図——西洋的な自立的個人観を排しながらも社会構造に動かされるだけではない、より現実在即した人間像を描く——に立ち戻り、それを発展的に継承する試みだと位置づけられている。なお、このような本書の研究視座を著者はさらに「エスノ・エージェンシー」という造語で概念化しているが、この点については後述する。

1 なお、第1章第2節第2項（18-30）にて記されている「移動の女性化」および「グローバル・ハイパガミー」、そして女性のエージェンシーをめぐる理論的動向については、拡充されたレビュー論文が発表されているので〔堀江2017〕、「女性の越境移動研究」に関心をもつ読者は本書とあわせて参照のこと。

第2章と第3章は、本書のエスノグラフィカル・セッティングとして位置づけることができる。第2章では、中国の公定少数民族の一つ「ラフ族」の歴史的背景から、「蜂を焼いた村」の名をもつ調査村（P村）の概況、さらに村の家屋（イエ）の空間秩序や婚姻と家族関係などが論じられ、第3章では、中国、雲南省、P村それぞれのレベルにおける女性の「遠隔地婚出」の趨勢、およびヨメを連れ出し／送り届けるための4種の仲介者の存在が紹介される。これらの記述は民族誌的にも興味深く読めるものだが、いずれの情報も、第1章で示された本書最大のキーワードの一つ「ヘパとポイする *Hehpa geh hpaw-e ve*」を徐々に具体化していく構成となっており、議論の展開としても巧みである。

ローカルターム「ヘパ」（＝漢族）、「ポイ」（＝逃げる）を交えて訳出されたこの素敵なフレーズは、P村の人々が見るところの「遠隔地婚出」を指す用語だとされる（37-38）。現地のラフが「ラフのくに」と対比的に語る「ヘパのくに」は、人により指示範囲も異なる曖昧なものである。人々が漠然と思ひ描く、「どこか遠くの」漢族のくにという心理的隔たりの感覚が、この遠隔地婚出（＝ヘパとポイする）という言葉には込められており、直訳調に「漢族と逃げる」と書いてしまつては零れ落ちてしまう質感を、この表現はうまく術語化している。

そしてこのフレーズのもつ厚みが、第2章から第3章にかけて徐々に明らかにされていく。たとえば第2章では、P村では駆け落ちもまた「ポイする」と語られていることが紹介され（102）、この言葉が有する、村のしがらみからの「逃避」というニュアンスを読者に喚起する。また、P村の歴史を紹介した箇所では、大躍進運動期の飢饉発生時に人々が国境を越えてミャンマーへと「ポイ」したことが紹介され、近年、動詞「ポイ」が指示する主な事象が、国外逃亡から「女性の流出」へと変遷してきたことの意味が問われる（72）。この点は第3章で量的データにより裏付けられ、P村における遠隔地婚出が、①1980年代後半を転機として発生し、②2000年ごろにピークを迎え、③2008年ごろより減少傾向となっていることが示される。

第4章は、評者の読みでは本書の白眉である。読者はここに至り、これまでの記述において文脈化されてきた遠隔地婚出という現象が、個々人によっていかに生きられてきたのかを知り、また、人々が口にする「ポイする」という言葉の、ときに批判的な、ときに同情的な声色を知るだろう。たとえば、上記①の時期に、夫や子供を失ったのち、突然姿を消すかたちで「ポイ」したナラさんや（事例1）、地震で死去した父の代わりに一家を支えて牛耕をし、そのあまりの辛さのために（「ポイ」ではなく）「ヘパと行ったのだ」と語られるシェイさん（事例4）。そして、仲介者ネットワークの発達により、ヨメ探しの漢族男性がP村を訪れるようになった②の時期に婚資を受け取るかたちで「結婚していった」、目の見えない女性ナチェさん（事例5）や、「ヘパのくにがどんどこか見てみようと思った」ので、「自ら広東に売られに行った」ナトさん（事例6）。いずれの「事例」も、個々人のショート・ライフヒストリーの紹介やその人物についての語りの記録という形式をとっているがゆえに、ラフ女性らの体験を身近なものとして感じられたという読後感を評者はもった。

さて、第4章後半部では、パーソンフッド論とエージェンシー論との関わりから「事例」が検討される。女性らの遠隔地婚出が彼女自身の意志によるものか、他者の行い（売られる、騙される、強要される等）のせいであるのかという問いが、現地の脈絡においては決定し難い性質のものであり、しかもその行為の責任の所在は、移動後の「女性の生活や考え、想起のあり方によっていかようにも変化しうる潜在性を持っている」（175）ことが示される。たとえば、友人に紹介されて行くことにしたという語りや、直前になって怖気づいたが父に怒られたから行くことにしたといった語りは、婚出という選択の責任を分散させる性質のものであり、ひとたび遠隔地での結婚生活に何らか（例えばDVなど）のトラブルが起こり出戻りするようなことになれば、責任の所在は遡及的に再解釈がなされうるという。

また、現地の「性愛呪術」の観念は、事態をさらに複雑にしている。有名なミャオの蟲毒〔川野 2005〕とは対照的に、P村で語られる性愛呪術（ショッツ）は外部の男性が地元女性に対して放ち、女性を村から連れ出すものとされている。そしてこれは、時に女性自身の非意図性や被害者性を仄めかす文脈で語られる。たとえば、ラフの夫を捨てて「ヘパとポイ」したナティさんは、その2日後に泣きながら夫に電話をかけて連れ戻しにきてもらった。だがその数日後、ナティは彼女の戸籍書類と共にふたたび姿を消す。しかしその5か月後に、「ヘパ」の姑に送り返されたというナティは郷里の夫のもとへと戻ってきた。ナティの処遇については議論が紛糾したが、夫との復縁を希望するナティは「移動の経緯は何も覚えていない」と述べ、さらにナティの友人が「ショッツを放たれたのではないか」と主張した。こうして、ナティの再婚は承諾された（事例12）。ナティの語りは「ショッツからの開放」という物語に回収され、ここでも、「ポイ」という行為の責任は分散されている。

これらの例から著者は、「女性の婚出には様々なアクターが関わっているために、それを女性一人の主体性に帰結させて語ることはできない」のであり、その女性を取り巻く人々らの解釈もまた「常にひとつの像を結ぶわけではなく、多声的に投げ出されたまま」となっていると本章を結んでいる（192）。

続く第5章では、P村を遠く離れ婚出した女性たちの暮らしが、安徽省、河南省、江西省、湖北省などそれぞれの生活環境に赴いて実施された聞き取り調査によって描かれる。マルチサイテッド・エスノグラフィーは、しばしば「言うは易く行うは難し」の調査手法だとも評されるが、著者は女性たちの語りに焦点をあわせることでデータの深度を担保しており、本章は同手法の好例として読むことができる。また、その時・その場所によって語られる内容は偏差に富むという語りの性質をうまく捉えているという点でも、本書全体の議論をより一層手厚くすることに成功している。

「ヘパのくに」に暮らす女性たちの生活状況は様々である。暴力をふるっていた前夫から逃げ、婚出先の生活に適応するかたちで暮らしている女性もいれば、現状に若干の不満をもち、将来的には故郷に戻るか別の地へと移ろうかと考える女性もいる。彼女たちの多くは数年に一度の頻度で故郷へと里帰りをするが、それはその後の生活を考えなおす契機の一つとなる。他の人と自らの境遇を見比べ、現状に何らかの葛藤を抱えていた場合に

は、里帰りはそのまま「逃げ帰り」へと移行する可能性もある。帰村中に彼女らを訪ねてくる未婚のラフ男性たちの存在により、女性たちの逡巡はより一層大きなものとなる。本章が示すのは、遠隔地婚出が常に次なる移動の可能性に開かれた実践であるということであり、それが「一度きりの片道切符ではなく、もし嫌になれば何らかの手段を講じて放棄すればよいものへと変化しつつある」(241)という事実である。

遠隔地婚出の出現、そして頻繁な里帰りや心変わりによる可変性は、従来までの「結婚して家をもって一人前」という村落および家の秩序を揺るがしてきた。女性たちの行為の意図や原因、そして将来のヴィジョンは、村人にとって理解し難いものとなってきた。P村のある呪医は「最近のラフ女性は大変乱れており、誰と結婚しているとも言えない」と述べたという(249)。第6章では、このような女性の「居場所」をめぐる人々の解釈と交渉の様子が、人の魂をめぐる治療儀礼および結婚交渉の事例から描かれる。

第6章でとくに強調されるのは、戸籍や結婚証といった国家制度の影響である。女性の所属の曖昧さや結婚関係の不安定性に対し、人と家との関係を確定させるこれらの制度が有する拘束力は新たな意味を帯びてきている。たとえば、ヨメ不足に直面しているP村のラフ男性らは近年、確実に妻をむかえるために、従来までは認められていなかった未婚のままでの同居を行うようになってきている。しかし、そのように男性側の家に入った女性のなかには、新たな恋人を見つけたり、遠隔地婚出を選択する者もいる。さらには、婚礼をあげた後にも「ヘパとポイ」してしまう女性もでてきた。そこでますます重視されてきたのが、結婚証の作成である。中国では結婚証をもたない男女の間の子供には戸籍は与えられず、たとえ女性が「ヘパとポイ」したとしても、それが結婚証の作成後であったならば離婚手続きが必須となる。このような拘束力を有するために、従来までの婚礼プロセスは改変され、婚姻のどの段階で結婚証を作成するのかが交渉されるという状況が生まれてきている。

著者は本章の纏めとして、現在の多くのラフ女性は、身体の居場所、(家に結びついた)魂のありか、そして戸籍の登録地や結婚証の相手などが多地域的に配置された状況のなかにあり、人々が議論し交渉しているのも、これら諸要素の「ハイブリッド」(ハウウェイ)としての女性の所在であると指摘している。

第7章の結論では、これまでの議論が総括され、本書で議論されてきたエージェンシー論／人格論、および「行政書類と身体の高ブリット」論の射程が示される。とりわけ重要なのが、著者が本書を貫く視座として提示していた「エスノ・エージェンシー論」である。

第1章において、エスノメソドロジーになぞらえて「エスノ・エージェンシー論」と名付けられた本書の分析視座は、移動する女性たちのエージェンシーを、「当事者たちが自己や他者の振るまいに対していかなる解釈を与え、理解しようとしているかという不断の相互行為の積み重ねとして捉える」(35)立場だとされていた。正直に言えば、この概念規定とその理論的意義が説かれた第1章の記述は評者にとってはやや難しく、当初はエスノ・エージェンシー論をよく理解することができていなかった。だが、第4章から第6章の民族誌記述を経て結論まで読みすすめたとき、著者によるこの造語の意味合いが非常に

よくわかったと評者は感じた。

すでに紹介した通り、著者は、本書の分析視座を既往の遠隔地結婚研究におけるエージェンシー論との対話から設定していた。エージェンシーという言葉が希釈され、「能動性」や「主体性」とほぼ同義の用語として使われる場合、そこで描かれる人間は「行為を能動する主体」としてのみ指定されてしまう。それに対して著者は、「自己をすでに成立したものと見なすのではなく、(中略)より環境依存的で不安定なものととらえる」(316)という人間理解を提示する。そこには著者がフィールドで目のあたりにした情景、つまり、見ず知らずの土地へとあまりにも軽やかに「ヘパとポイ」する一方で、ときに周囲の意見に心を揺さぶられ逡巡し、また残してきた我が子のことを想う女性たちの姿があったに違いない。

そして、このようなフィールドの状況を描く上で著者が重視したのは、「女性たちの行為が周囲の人々によってどのように解釈され、語られているのか」(316)という点であった。これこれの行為が「女性のエージェンシーの発揮だ」などと分析してみせるのではなく、その行為をローカルな人々(エスノ)の視点から捉える。著者は、その分析態度の意義を、より具体的に女性の立場を文脈化することだと述べているが、これは確かに成功していると評者は読んだ。「ヘパとポイした」ことをめぐり、状況に応じて異なる本人の語り、そしてその女性を評する、家族や友人らのそれぞれに異なる意見。それはまさに多声的なものであり、また必ずしも明晰な像をなさないそれら声の集積は、そのままその女性にとっての居場所を示しているように評者には感じられた。

評者の理解からあらためて述べるならば、エスノ・エージェンシー論とは何らかの事例を切り出して理論的意義を付与するタイプの分析概念ではなく、民族誌家としての一つの研究姿勢の表明である。そしてその射程は、エージェンシー論に限られるものではないだろう。現地の人々の視点を重視し、フィールドの文脈に即した記述分析をより具体的に行おうとする時、本書が提起したエスノ・エージェンシー論は、有益な視点となるはずである。

以上、本稿では評者の理解を交えながら本書の内容について紹介してきた。とくに面白く読んだ論点については概ね言及できたつもりだが、最後にもう一つだけ述べておきたいのが、エスノ・エージェンシー論とも大きく関わる、本書の「事例」の提示の仕方である。

本書の第4章から第6章では、「事例」の見出しのもと計31種のライフヒストリーが提示され、そこでは20名以上の女性の姿が描かれる。「事例」の提示の形式には若干のばらつきを感じるかもしれないが、それぞれの「事例」では著者の観察や補足説明を交えつつも、本人の語りや周囲の語り声が、それぞれの言葉遣いを留めながら、ときに数ページにわたって記されている。ともすれば人類学理論に寄与するための行論では削除されがちな民族誌的細部を留めた本書の「事例」がもつ迫力に、評者は大きな感銘を受けた。

また、この「事例」は各章ごとの主題に沿って配置されているが、とくに数名の女性たち(本書評では言及できなかったナウーさんやナヨさんやサンメイさん)は、「事例」や章をまたがるかたちで、繰り返し登場している。その点を著者は「事例が細切れになって

しま」だったが、「多角的に彼女たちの人生が見えてくるような構成になるように留意したつもり」だと謙遜しながらさらりと書いているが(148)、これは拡大事例研究法(Extended Case Method)の今日的な応用例だと見なすことができるだろう。語りがなされる個々の場面を重視し、それぞれを重ね合わせていくという本書の課題と親和的な記述法によって、ナティさん(事例9,12,27)らは、サンドンプ氏と同様に[Turner 1958]、多くのことを読者に教えてくれるはずである。

本書を通読して、評者の人類学概念箱のなかには「ヘパとポイする」という新たな用語が加わった。この知見は中国のいまを、そして今日グローバルに展開している移動現象を考える上で、評者にとって非常に大きな収穫となった。

<参考文献>

川野明正 2005 『中国の＜憑きもの＞——華南地方の蟲毒と呪術的伝承』風響社。

堀江未央 2017 「女性の越境移動研究の展開——アジアにおける婚姻移動を中心に」『社会人類学年報』43:145-163。

Turner, Victor Witter 1958 *Schism and Continuity in an African Society: A Study of Ndembu Village Life*. New York: The Humanities Press.